

UNDER CONSTRUCTION アウトリーチ プログラム

東京都庭園美術館
アウトリーチプログラム報告 No.1

出前ミュージアム@港区立青山小学校

東京都庭園美術館は港区地域振興課の「みなとミュージアムズ事業 出前ミュージアム」に参加し、平成23年11月9日(水)に、港区立青山小学校にて出前授業を行いました。これは港区内のミュージアム(博物館・美術館)がそれぞれ授業のプログラムを提案し、区内の小中学校から要請があったものを実施するという事業で、今年度から新しくはじまったものです。当館も7つのプログラムを提案し、そのうち「教室を美術館にしよう！」に興味をもってくれた青山小学校の図工科担当である中村奈穂子教諭と共に、打ち合わせを重ねて「作品を展示して展覧会をしよう」というプログラムを実施しました。

プログラム作り

青山小学校では隔年で児童の作品を展示する展覧会を開催しており、本年は11月18日・19日に行います。今回の授業の対象となった5年1組の19名の児童たちは、一学期に制作してあった焼き物と版画を展示することになっています。中村先生はこの展覧会を機会に、児童たちに展示について考えて欲しいと考えていたそうです。作品の展示とは、ただ並べるだけではなく、その作品が最もよく見えるようにすることです。そのためには、どこがその作品の良さなのかを見極める必要があり、鑑賞する力も大きく関わってきます。そこで本プログラムは、自分たちの作った焼き物をどうやって見せるのがいいか、お互いに友達の作品も鑑賞して話し合いながら、グループで展示を行うという流れにしました。

また、美術館スタッフが事前に授業中の児童の様子を見学させてもらったところ、造形や色彩から想像力を働かせて言葉にするのが苦手なようだという感想を持ちました。例えば青は海、緑は森、というような紋切型の認識で留まってしまい、「これはなんだろう？」とじっくりと鑑賞をするということには慣れていないようです。海は海でも、どんな生き物がいて季節はいつで、どこの海なんだろう・・・と想像を広げていく体験ができれば、小さな特徴も見逃さずに息をつめて

作品を見る楽しさを知ってくれるのではないのでしょうか。先生もその点を気にしていたため、出前授業のプログラムの最後には、タイトルをつけるという活動を通して、言葉でイメージを広げていく体験をしてもらうことにしました。

授業スタート

さて、出前授業の当日。中村先生が美術館スタッフを紹介して、授業がはじまります。

まず美術館とはどんなところなのか話をした後で、東京都庭園美術館での展示風景を写真で紹介しました。「もともとは美術館じゃなくて、おうちだったんだよ」というと、子どもたちが驚きます。その中でテーブルセッティングを再現してテーブルウェアを展示したり、パーティーのようなしつらえの中にマネキンを立ててドレスを展示したり、絵画作品を展示する際にも壁の色を変えたりと工夫をしていることを伝えました。



次はアイスブレイクとして、作品の写真をプリントしたマグネットを黒板に貼って、展示の工夫についてみんなで考えていきます。美術館の展示の現場では、展示する順番や配置、照明の当て方や視線計画・導線計画など、さまざまなことを考慮しながら展示を行っています。今回児童たちにとりくんでもらうのは、

作品を展示する台紙の色選びと配置の工夫に限定しました。黄・赤・紺の3色の画用紙の上に作品マグネットを貼ってみると、台紙の色によって作品の見え方が全く違うことが実感できます。「どこに展示したらいいと思う？」と問いかけると、児童たちが矢継ぎ早に答えてくれます。しかも「作品の中にこういう色があるから、台紙はこの色がいいと思う」と、きちんと作品を見て理由を説明しながら答えてくれたのには、先生も美術館スタッフも驚きです。続いて複数点を展示する際に、どのような配置にするとよいかについても、活発に意見を出してくれました。



グループワークと発表

さて、いよいよ自分たちの作品を展示する番です。4グループに分かれてのグループワークでは、それぞれのグループに一人ずつ美術館スタッフが入って、児童たちの話し合いをファシリテートします。

まずは自分の手元にある作品をよく見て、一番見せたいところを探して矢印を付箋でつけます。一周ぐらりと同じデザインのもので、釉薬がきれいに塗れているところや、形のゆがみが面白いところなど、見る角度によって表情が変わります。作った本人が見せたいと思うところと友達がいいと思うところが違うと、矢印があちこちについてしまいますが、話し合っって作品の「見せたいポイント」を決めました。



次にそれぞれの作品の「見せたいポイント」が正面に来るように配置をし、同時に台紙の色を選びます。机の上には9色の画用紙が置いてあるので、実際に作品を置いてみながら、ああでもないこうでもないという試行錯誤の繰り返しです。しかし並べているうちに、まったく別個のものであった作品たちがグループとしてまとまってきて、なんらかのテーマのようなものが見えてきます。



展示ができあがったところでグループごとに発表をしてもらいました。感覚的に「このほうがカッコいい」という配置をして、その理由がなかなか言葉にならないグループもありましたが、「器の内側に模様があったりして、上から立体的に見て欲しいと思ったので、(視線を誘導するために)柱を立てました」という理由で台座などに工夫をしたグループもあり、児童たちはそれぞれ他のグループの発表にも刺激されたようです。



タイトルをつけよう

そして最後に、タイトルをつける作業です。

美術作品には慣例的にタイトルをつけることが多く、そのタイトルが作品にあらわされているものが何であるかの説明(画題)になっている場合もあれば、直接的に造形の説明にはなっておらず造形(作品)と言葉

(タイトル)との間に微妙な乖離があり、その乖離がさまざまな想像を喚起させて面白さを生むという場合もあります。タイトルの面白さを知ってもらうために、美術作品の写真(岡本太郎《森の家族》川崎市岡本太郎美術館蔵、舟越桂《肩で眠る月》愛知県美術館蔵など)をいくつか用意し、作品を見てどんなタイトルだと思うか考えてもらうことにしました。



児童たちははじめ「木!」「顔!」などのように見えたものをそのまま口にしていましたが、徐々に抽象的な表現や「○○な▲▲」といった修飾語を使った言葉も使うようになり、さまざまな意見を出してくれました。そして単にクイズのように答えを当てて終わりではなく、タイトルを知ってからさらにその言葉に解釈を加えていくような発言が続いたことには、日ごろの児童たちをよく知っている先生も驚きでした。じっくり見て鑑賞するという体験が、彼らの導火線に火をつけたようで、花火のように次々と言葉が飛び出します。その姿を見ることは、美術館スタッフにとっても、幸せな体験でした。

そしてその興奮のさめやらぬうちに、自分たちの展示にもタイトルをつけます。児童たちはすでに自分の焼き物にタイトルをつけていましたが、《ペン立て》や《緑色の皿》など、用途を説明しているだけのものが多くありました。この授業では、個別のタイトルはそのままとして、グループで行った展示全体からイメージをふくらませてタイトルをつけることにします。作品の配置や色などから児童たちがつけたタイトルは《幸せいっぱい森森ちゃん》《春のはじまり》《3ピラーフォレスト》《アース・グラフィティ》。想像を広げる楽しさの伝わってくるタイトルばかりです。英語を使ってみたいくて「柱は英語で何て言うの?」と大人に聞いたりしながら、4つのグループの展示が完成しました。

最後に先生がそれぞれのグループの展示の写真を撮り、みんなで美術館スタッフにお礼を言って授業終了です。

今後に向けて

今回が東京都庭園美術館としては初めての出前授業でした。「美術館に実際に足を運んでもらって美術作品に触れてもらうのが本当であって、来館の予習や復習ではなく、本物の美術作品を見ないアウトリーチ活動にどれだけの意味があるのだろう」と半信半疑な面もあったのですが、スクリーンで写真を見せるだけでも、美術鑑賞のはじめの一歩を体験させることができたという手応えがありました。「色」や「タイトル」というように、その都度注目するポイントを限定したことも、児童たちには参加しやすかったようです。こうした授業プログラムは、ある程度パッケージ化して汎用的に行うことも可能であり、また学校教育の現場からはそのような要望も出ていますが、担当教員と美術館スタッフがその都度対象となる児童たちの課題と照らし合わせてカスタマイズする必要があるでしょう。

また、グループで話し合って展示の方法やタイトルを決めるといのは難しいことですが、ファシリテーターとして美術館スタッフが各グループに入り、児童一人一人の意見を受け止めたことが有効であったと感じます。これに関しては、私たち美術館スタッフのスキルアップも不可欠であると考えていますし、ボランティアとの連携など人的対応の充実を図りたいところです。

今後も当館ではリニューアル準備の休館期間中、出前授業やワークショップなど、アウトリーチプログラムを展開していく予定です。美術作品に触れる喜び、美術館に行く楽しさを少しでも多くの人に味わってもらうため、まだ端緒についたばかりのこの活動を、大きく育てていきたいと思えます。

執筆：事業企画係 八巻

東京都庭園美術館の教育普及活動
およびアウトリーチプログラムについてのお問い合わせは

東京都庭園美術館リニューアル準備室
事業企画係 教育普及担当

〒108-0071 東京都港区白金台 5-21-9

Tel 03-3443-0201 Fax 03-3443-3228

(休館中も連絡先に変更はございません)